

体育教師の社会的地位に関する研究 (IV)

—— 一般社会人を対象とした調査研究 ——

岡田 猛*・武隈 晃**

(1990年10月15日 受理)

On the Social Status of the Physical Education Teacher (IV)

—— A Study on Ordinary Adult People ——

Takeshi OKADA* and Akira TAKEKUMA**

研究の目的・方法

1) 研究の目的

体育指導における科学化と民主化はいうまでもなく戦後体育を画期づけるものであり、これまでに多くの貴重な実績を積みあげてきたことに異論を差しはさむ人は少ないであろう。ここでそれらの内容に立ち入ることは控えるが、このことは体育実践を中心的に担う体育教師の地位になんらかの影響をあたえていることが予想される。一方、戦後日本の社会変動にも目をみはるものがある。労働の機械化、自動化による生産性の向上およびその歪みとしての各種ストレスの惹起、人間関係の疎外化が急な速度ですすみ、同時に余暇の増大がもたらされた。これらの複雑な要因は、社会における運動・スポーツの文化的価値の見直しを要請するとともに、当文化の体系的内面化を目的とする学校体育、その担当者としての体育教師の地位にすくなからぬ影響を及ぼしていることが考えられる。

一般に「個人や集団の権利と責務は、基本的にはその個人や集団が社会体系の中でどのような位置を占めているかによって決定されるものとみられるので、社会的地位は人びとの役割行動や職能の因果関係的理解を深め、その操作的改善への手がかりを与える」¹⁾と考えられ、社会的地位の研究の重要性が指摘される。

本研究では、以上の文脈においてみられる体育教師の社会的地位を明らかにしたい。

社会的地位は「人びとの欲求の対象であるさまざまな社会的資源とその獲得機会が、不平等に分

本研究は文部省科学研究費補助金（一般研究C課題番号61580113）による研究成果の一部である。

* 鹿児島大学教育学部保健体育科（体育原理・体育社会学）

** 鹿児島大学教育学部保健体育科（体育経営学）

配されている状態」²⁾と定義されるが、ある人は、体育教師という地位を占めることによってそれと区別される地位の占有者に比して種類と程度において異なった社会的資源を受け取るのである。

また、いわゆる社会的地位はさまざまな要因の複合的アンサンブルとして生起するのであるが、なかでも、職業、教育、所得は主要なものであり、「基本的地位変数」と呼ばれる。³⁾

本研究ではもっぱら職業という観点から体育教師の社会的地位を解明することにする。したがって「体育教師の職業的地位」という内容にそった分析が中心になる。

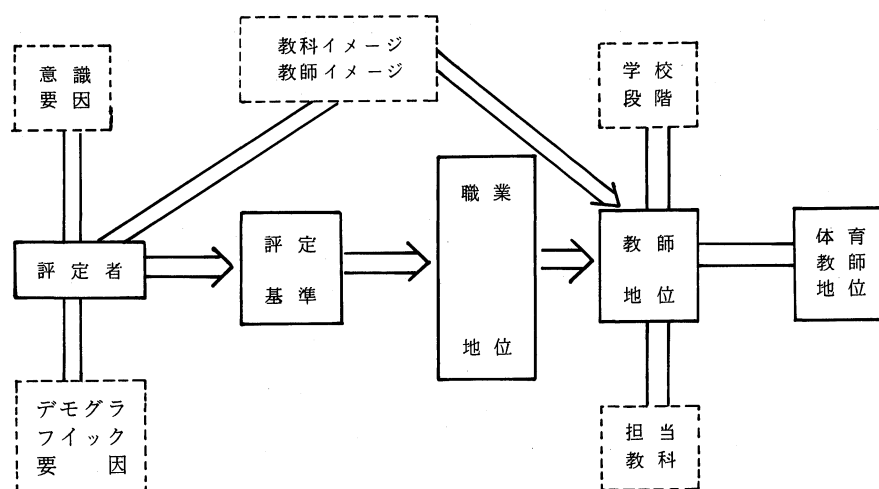
2) 分析の枠組み

体育教師の社会的地位を明らかにするのが目的であるが、それは、社会的地位が「不平等」を内的契機にした概念であるといわれるように、他との比較においてはじめて明らかにされる。

「職業」という観点から体育教師の社会的地位を明らかにしようとする本研究の意図は、比較の対象として他の職業や体育教師以外の教師をとりあげようとする調査・分析の枠組みからできたものでもある。

このような文脈において、以下に図示するような調査・分析の枠組みを設定して研究をすすめることにした。

図1 調査・分析の枠組み



若干の説明をくわえておこう。

各種意識やデモグラフィック要因からなる属性を刻み込まれた評定者は、特に職業の評価基準をもとにして、生活の基底をなす各種職業を評定する。そのなかで他の職業に比較されて教師職が地位付けられるのであるが、教師それ自体、所属する学校段階や担当教科によって違った地位評定を受けるであろう。その際学校生活を通して内面化された評定者の教科や教師にたいするイメージは特別な影響を及ぼすことが予想される。ここに職業としての体育教師の地位が明らかにされることになる。

換言して、仮説（調査、分析の焦点）というかたちで示せば次のようになるであろう。

① 教師の地位は学校段階による分化する。

つまり学校段階が高くなるにつれて教師の地位は高くなる

② 教師の地位は相当教科により分化する。

歴史的、社会的に規定された教科内容への評価、受験といった社会的要因の影響をうけて、担当教師の地位に分化が生ずる。これらの要因は体育教師の地位に対して有利にははたらかないであろう。

③ 経験を通して抱かれた教科・教師に関するイメージは、教師の地位を規定する重要な要因であろう。

④①、②、③が、評定者の属性（意識、デモグラフィック要因）によってどのように変わるか。

3) 調査の方法

調査の対象、方法、期間は以下の通りである。

調査対象；鹿児島市内在住の成人男女800人

「選挙人名簿登録者」より層化無作為により抽出

調査方法；質問紙を用いた郵送法

調査期間；1988年1月～2月

有効回収サンプル数は218（回収率27.3%）であり、その構成は以下の通りである。

性	年齢		学歴		職業			
男 47%	20代	17%	中学	14%	事務	33%	営業	6%
	30代	21%	高校	57%	主婦	26%	自由（自営）	
女 53%	40代	26%	短大	11%	労務	7%		6%
	50以上	36%	大学	18%	専門・技術	6%	その他	16%

質問紙法一般にいわれるのと同様、この結果は、実際の収入などの客観的なデータに基づくものではなく、回答者の意識を通して得られたものである。このような「主観的方法」に基づく職業的地位の評定については種々論議のあるところであるが、直井は①妥当性の問題、②信頼性の問題、③有効性の問題の3点についての吟味によりそれがすぐれたものであることを実証している。⁴⁾

もとより「主観的方法」に固有の欠点はあるであろうが、その限界に留意しながら結果を読み取れば十分に意義のある分析が可能であると考えられる。

ところで、社会的地位に違いをもたらす社会的資源は、物的資源、情報資源、人的資源、関係資源からなるとされるのであるが⁵⁾、以上に述べた方法から明らかにされる社会的地位がもっぱら関係資源に基づくものであることはことわるまでもないであろう。

註

- 1) 前田他編, 教師の心理(2), 有斐閣 1987 5 ページ
- 2) 直井 優, 職業的地位尺度の構成 富永健一編; 日本の階層構造, 東京大学出版会 1979 436ページ
- 3) 富永健一, 社会階層と社会移動へのアプローチ 同上; 21ページ
- 4) 2) 434~472ページ
- 5) 吉田民人, 社会体系の一般変動理論 青井和夫編; 社会学講座 1, 理論社会学, 東京大学出版会 1974 189~238ページ

結果と考察

I. 体育教師の地位

1) 教師の職業的地位

教師は、他の職業にくらべてどのような地位におかれているのだろうか。

教師論研究が「教師の心構えないし教育の仕方」を説く「哲学的、道徳的、文学的ないし、せいぜい教授学的な教師論」に終始していると総括されたのは今から約15年前である。¹⁾ 以来この分野における実証的な研究の蓄積があったのも事実であるが、依然として「学校段階ごとの実証的研究が待たれる。」²⁾ と指摘されるように、「一方では学校の種類や段階により、他方では教師の属性、例えば担当教科、職位、年齢、性別などにより、教師の再分類が行われ、そうした下位分類ごとの教師研究がなされなくてはならない」³⁾ との課題提起はまだ無効にはなっていないのである。本研究においては、比較対照するために16の職業をとりあげ、なおかつ教師を小学校、中学校、高校の三段階に分けて、評定をうけさせた。その結果をしめしたのが表-1である。

日本におけるこの種の代表的調査は、SSM (Social Stratification and Social Mobility) 調査⁴⁾ であるが、ここで取り上げた職業は比較を可能にするためにSSM調査から抽出した。

なお、地位スコアもSSM調査にならって算出したものである。つまり、1. 最も高いから、5. 最も低いまでの五段階で評定させた結果を、それぞれ100点から0点までの25点間隔に換算したものの平均値をもって地位スコアとしたのである。

1975年のSSM調査に比較して比較的差がでていいるのは、プロ野球の選手、ファッションモデル、農業であり、他の職業についてはおしなべてSSM調査の結果を裏書きするものとなっている。

一瞥して、教師が中くらいの位置に評定されていることが明らかである。

医師、弁護士といったいわゆる専門職が上位に評定され、農業、及び美容師、電気機関士などの熟練的職業、非熟練的職業としてのファッションモデルなどが低く評定されている。

教師については従来その地位向上の願望とからんで“専門職としての教師=教師専門職論”が論議、追求されてきた⁵⁾ のであるが、近年になって半専門職ないしは準専門職としての位置付けがあらわれてきたのはこのような事情にも起因するのではないかと思われる。⁶⁾

ところで、教師の学校段階による地位の分化をみるために教師を小・中・高の三段階に分けて示

表1 職業地位スコア N=218 1988.2

職業	SSM調査	今回調査			教科別教師
		男	女	全体	
医師	82.7 (2)	88.7	91.8	90.4 (1)	
弁護士	87.3 (1)	90.8	89.0	89.8 (2)	数学 (83.7)
国会議員	81.1 (3)	81.3	80.3	80.8 (3)	英語 (77.0) 国語 (71.6)
大会社の課長	65.9 (4)	68.9	67.4	68.1 (4)	理科 (70.9)
プロ野球の選手	58.2 (11)	67.8	64.3	66.0 (5)	
新聞記者	64.6 (5)	65.2	65.8	65.5 (6)	
高等学校教員	62.9 (6)	63.8	63.9	63.9 (7)	
市役所の課長	60.0 (10)	62.8	62.6	62.7 (8)	社会 (63.4)
中学校教員	62.9 (6)	60.9	61.6	61.3 (9)	
小学校教員	62.9 (6)	60.6	60.7	60.7 (10)	
デザイナー	56.3 (12)	60.2	61.2	60.7 (11)	
機械技術者	61.0 (9)	59.5	59.6	59.5 (12)	
中小企業の課長	55.9 (13)	53.7	53.3	53.5 (13)	
警察官	54.2 (14)	53.2	51.6	52.4 (14)	
卸売店主	52.5 (15)	52.1	49.5	50.7 (15)	
電気機関士	51.8 (16)	48.9	50.7	50.0 (16)	音楽 (48.4)
ファッションモデル	31.4 (19)	50.5	45.3	47.8 (17)	美術 (47.4) 体育 (45.3)
美容師	45.0 (17)	45.2	42.1	43.5 (18)	技・家 (41.0)
農業	45.0 (17)	38.6	37.7	38.1 (19)	

()内は順位を示す
 SSM調査(1975)では学校段階ごとの調査がおこなわれていないため、小学校・中学校・高校教員は同一スコア

したのであるが、それほど大きくはないけれどもそれらの地位スコアに違いがあることがみてとれる。

特に、高校と小・中の教師の間に開きがある点は、1986年度調査と同じ傾向である。

2) 担当教科別にみた教師の地位

先ほどの表-1に示されているように、教師は担当する教科によってその地位が分化する。

今日のわが国においては原則として、中学校以降になると教科担当制になるが、同じ段階の学校において教鞭をとっていてもこのように受け持つ教科によってその地位はおおいに影響をこうむるのである。

高い順から、数学、英語、国語、理科、社会、音楽、美術、体育、技術・家庭となっている。ま

た、数学が国会議員クラスであるのにたいし、体育、技術・家庭は美容師や農業のスコアに相応しており、スコアのバリエーションはきわめて広いものとなっている。調査の技術上の制約から、この教科別教師の評定は、前記各種職業とは別の項目として質問されており、このような比較はあるいは厳密さを欠くところがあるかもしれないけれども、それにしても興味ある結果である。

以上の結果は、'86年調査とほとんど変わらない。

分布の仕方をみてみると、数学、英語、国語、理科が上位においてかたまっており、音楽、美術、体育、技術・家庭が下位においてグループを形成している。そのなかで、社会だけがひとり中位を占め独特の様相を示している。この分布の仕方も'86年調査（武隈晃・岡田猛「体育教師の社会的地位に関する研究（Ⅱ）～大学生による評価～」鹿児島大学教育学部研究紀要第38巻、及び、岡田猛・武隈晃「体育教師の社会的地位に関する研究（Ⅲ）～教師内地位の分化と教科・教師イメージ～鹿児島大学教育学部研究紀要第39巻参照）に極めて似通ったものとなっている。

3) 学校段階・担当教科別にみた教師の地位

教師がその地位を全体的にまとめて示されるにはあまりにも内部的な分化がおおきく、そこには所属する学校段階、担当教科、とりわけ担当教科が強く影響していることはみてきたとおりである。

ところで、学校段階、担当教科というふたつの要因は、実際には複合されて一人ひとりの教員の地位を規定していると考えられるのでその様子を見てみよう。

中・高の2段階と9教科の組み合わせで18種類の教師職が分類されるが、調査技術的にみるとこれらのリストを教師外の各職業に並べて評定させることには無理がある。そこで調査が順位づけ（ranking）でなく評定（rating）によっていることから、別々の質問項目においてそれぞれに評定された学校段階と担当教科の地位スコアの幾何平均をもって学校段階・担当教科別教師の操作的な地位スコアとした。

以上の操作により算出された各種教師職の地位スコアを全体および性別に示したのが表-2である。

学校段階に比べて担当教科の影響力が大きかったことから、国語と理科、および音楽と美術の間を除いて、教科が隣合わせに並ぶ結果になっている。小学校教師にたいして、中学校や高校の教師だからどうということは一概にはいえず、音楽や美術、体育、技術・家庭の担当教師にあっては中学、高校を問わず小学校教師よりも低く評価されるという興味深い結果をだしている。

体育は高校、中学とも19教職中16、17位と下位におかれている。

次に男女別に目を転じてみよう。

差に違いはありながらも、男性に比べて女性は一貫して高い評定をしており、特に高校・英語、中学・英語、高校・理科、中学・理科、高校・美術、中学・音楽、中学・美術において2ポイント以上の差がみられる。体育は中学では同順位の17位であるが高校では女性が16位であるのにたいして男性が13位に評定しているのが特徴的である。しかしながらスコアそのものには大きな差異はない。

表-2 学校段階別教科別地位スコア一覧
N=218 1988

	全 体	男 子	女 子
教 師	順位 地位スコア	順位地位スコア	順位地位スコア
高校・数学	① 73.1	① 73.0	① 73.2
中学・数学	② 71.6	② 71.3	② 71.8
高校・英語	③ 70.1	③ 68.8	③ 71.2
中学・英語	④ 68.7	⑤ 67.2	④ 69.9
高校・国語	⑤ 67.6	④ 67.6	⑥ 67.6
高校・理科	⑥ 67.3	⑥ 66.2	⑤ 68.2
中学・国語	⑦ 66.2	⑦ 66.0	⑧ 66.4
中学・理科	⑧ 65.9	⑧ 64.7	⑦ 66.9
高校・社会	⑨ 63.6	⑨ 63.0	⑨ 64.2
中学・社会	⑩ 62.3	⑩ 61.5	⑩ 63.0
小学校教師	⑪ 60.7	⑪ 60.6	⑪ 60.7
高校・音楽	⑫ 55.6	⑫ 54.7	⑫ 56.4
高校・美術	⑬ 55.0	⑭ 53.6	⑬ 56.3
中学・音楽	⑭ 54.5	⑮ 53.4	⑭ 55.4
中学・美術	⑮ 53.9	⑯ 52.3	⑮ 55.2
高校・体育	⑯ 53.8	⑬ 53.7	⑯ 53.8
中学・体育	⑰ 52.6	⑰ 52.4	⑰ 52.8
高校・技家	⑱ 51.2	⑱ 50.9	⑱ 51.4
中学・技家	⑲ 50.1	⑲ 49.7	⑲ 50.5

表-3 地位スコア一覧（学校段階*教科）
N=218 1988

順位	職 業	地位スコア	順位	職 業	地位スコア
1	医 師	90.4	19	小 学 校 教 員	60.7
2	弁 護 士	89.8	20	機 械 技 術 者	59.5
3	国 会 議 員	80.8	21	高 校 ・ 音 楽	55.6
4	高 校 ・ 数 学	73.1	22	高 校 ・ 美 術	55.0
5	中 学 ・ 数 学	71.6	23	中 学 ・ 音 楽	54.5
6	高 校 ・ 英 語	70.1	24	中 学 ・ 美 術	53.9
7	中 学 ・ 英 語	68.7	25	高 校 ・ 体 育	53.8
8	大 会 社 課 長	68.1	26	中 小 企 業 課 長	53.5
9	高 校 ・ 国 語	67.6	27	中 学 ・ 体 育	52.6
10	高 校 ・ 理 科	67.3	28	警 察 官	52.4
11	中 学 ・ 国 語	66.2	29	高 校 ・ 技 家	51.2
12	プ ロ 野 球 選 手	66.0	30	卸 売 店 主	50.7
13	中 学 ・ 理 科	65.9	31	中 学 ・ 技 家	50.1
14	新 聞 記 者	65.5	32	電 気 機 関 士	50.0
15	高 校 社 会	63.6	33	フ ァ ッ シ ョ ン モ デ ル	47.8
16	市 役 所 課 長	62.7	34	美 容 師	43.5
17	中 学 ・ 社 会	62.3	35	農 業	38.1
18	デ ザ イ ナ ー	60.7			

表-3は、これらの学校段階・担当教科別各教師職を他の職業のあいだにプロットしたものの一覧である。

担当教科のみにおける評定（表-1参照）に比べると、中学校や高校の教員としての学校段階別

地位スコアに引き寄せられて学校段階・担当教科別教員の間の分散は小さくなっている。医師や弁護士といった専門職に近い所に置かれていた数学教師も、高校・数学教師として大会社課長のスコアに近くなり、逆に農業や美容師に相応していた技術・家庭は上昇し中学の段階でさえ卸売店主に近付いている。

このことを体育教師に即していうならば、“体育担当者としては低く評定されているけれども、それが、少なくとも中学や高校という職場に所属しているということによって中小企業の課長レベルのスコアまでにその地位スコアが引き上げられている”ということになるであろう。

しかしながら全体としてみたときの基本的特徴は教師職の間におけるその地位の分化の大きさにあることは疑い得ない。このような教師の職業的地位の分化に照らし合わせるとき、「教師」ないし「小学校教師」という単独の項目を設定した従来の数少ない実証的調査研究は、教師研究に焦点づける限り不十分であるという感は否めないであろう。⁷⁾「下位分類ごとの教師研究がなされなくてはならない」という教師研究一般においてなされている指摘⁸⁾の妥当性を裏付けたものといえよう。

なお「体育教師」についてみると、35職業中、「高校・体育」は25位、「中学・体育」27位として、低く評定されている。

4) 教師間のパターン分類

教師は担当する教科によってその地位が大きく分化することは既に明らかにされた。そしてその結果は、教師は担当する教科が受験教科であるのかないのかといった、いわば客観的な観点からなされる分類が有効であることも明らかになった。しかしながらそこで用いられた地位スコアの平均値はあくまでも複数の測定値を単一の指標に代表させたものであるから、個々の測定値の変動やそのパターンのあり方を十分に表現するものではないことにも我々は留意しなければならない。

ところで、質問紙においては回答者はすべての教科教師に対する地位評定をもとめられているのであるから、回答に際して彼らは個々の教師を絶対的に評定したのではなく、全教科を横目に見ながら相対的な評定を個々の教師にくださったものと考えられる。

そこで、ここでは視点を変えて、回答者による評定のされかたからみた場合に教師はどのように分類されるかを検討することにしよう。解析の方法としては、“パターン分類の数量化”として知られる林の数量化Ⅲ類を用いることにする。なお、回答者の数の少なさを勘案し、煩雑さを避けるために、回答を再カテゴリー化し、‘最も低い’‘やや低い’を“低”に、‘最も高い’‘やや高い’を“高”にした。‘普通’はそのまま“中”である。

表-4はその結果を示したものである。

I軸、II軸、III軸にたいする数値の出方からみると、教師はおおきく五つのパターンに分類されるようである。

第一グループは、低い地位スコアを与えられた教師であり、理科を唯一の例外としてすべての教

表-4 評定された教師のパターン分類
 数量化Ⅲ類による N=175 1988

	I 軸	II 軸	III 軸
英-低	2.07	-7.76	-15.44
国-低	4.65	-7.15	-14.59
社-低	3.43	-4.98	-9.24
音-低	2.86	-2.49	-1.07
美-低	2.76	-2.10	-0.09
体-低	2.49	-2.61	-1.58
技-低	2.18	-1.54	-0.00
数-中	-4.25	-1.55	-1.98
英-中	-3.69	-1.72	-1.07
国-中	-2.08	-1.88	-1.57
理-中	-1.84	-1.73	-1.42
社-中	-1.24	-1.68	-0.49
数-高	0.88	0.32	0.41
英-高	0.97	0.58	0.52
国-高	1.10	1.31	1.33
理-低	1.50	2.93	1.07
理-高	1.07	0.93	0.83
社-高	1.10	2.48	1.54
美-中	-1.50	0.06	2.15
体-中	-1.17	0.05	1.62
技-中	-1.86	0.19	0.84
音-高	-0.77	4.93	-6.37
美-高	-0.69	3.89	-6.50
体-高	-0.53	5.66	-3.43
音-中	-0.77	-0.19	1.62
技-高	0.19	7.54	-5.64

科教師がここに含まれる。

第二グループは中程度のスコアを得たいわゆる受験五教科である。同程度の評定を受けながらこのグループから除外された教師は、音楽を別にして、第五グループを形成している。

第三グループは、第一グループからはずれた低評定理科の他は全て、高い地位スコアを与えられた受験五教科によって構成されている。

同じく”高”評定を受けながらこのグループからはじかれた教師は、技術を別にして第五グループを形成している。

ところで、以上の分類は、それぞれの軸上の原点にたいしてプラスであるかマイナスであるかを一応の目安にしてなされたものであり、厳密に相互間の距離に基づいた分類ではない。例えば、 -0.1 と $+0.1$ は符号は異なっているが、同じ符号に属する -0.1 と -0.3 の間の距離よりも短いのである。

そこで、それらの実際の分布をみるために、Ⅰ軸、Ⅱ軸、Ⅲ軸を相互に交差させた平面に各教師をプロットしたものが図-2、図-3、図-4である。

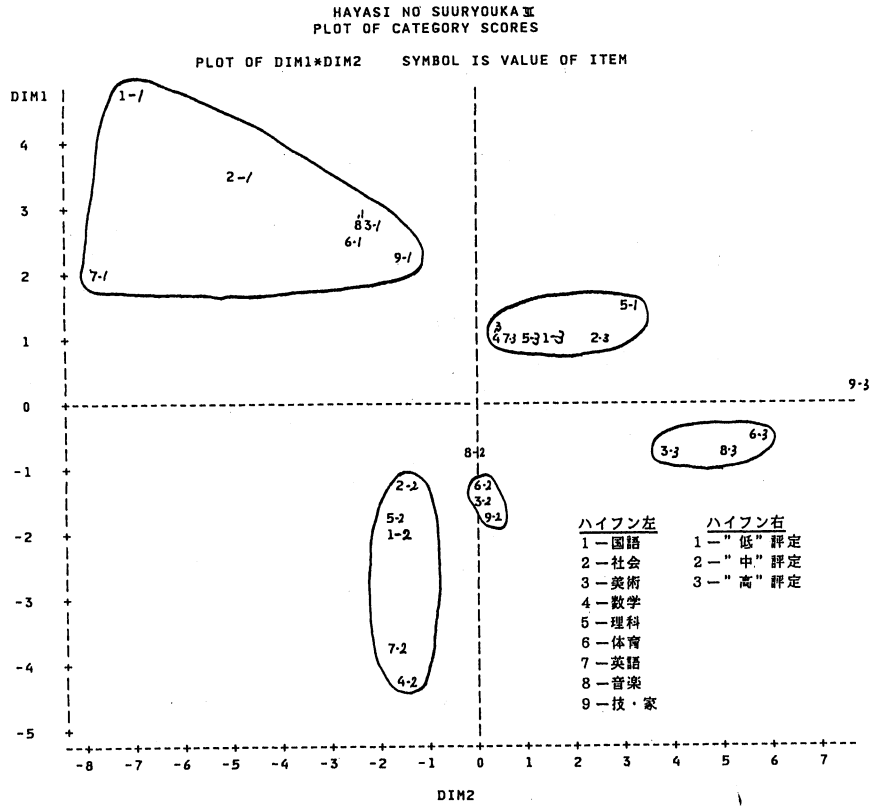


図-2 数量化Ⅲ類による教師のパターン分類 (1軸×2軸)

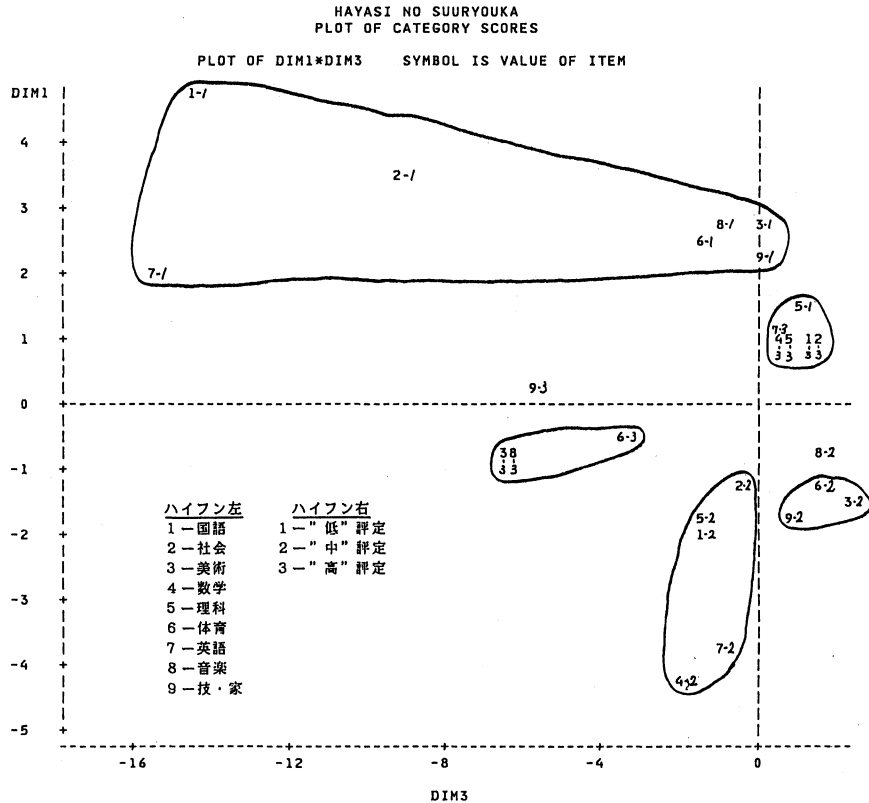


図-3 数量化Ⅲ類による教師のパターン分類 (1軸×3軸)

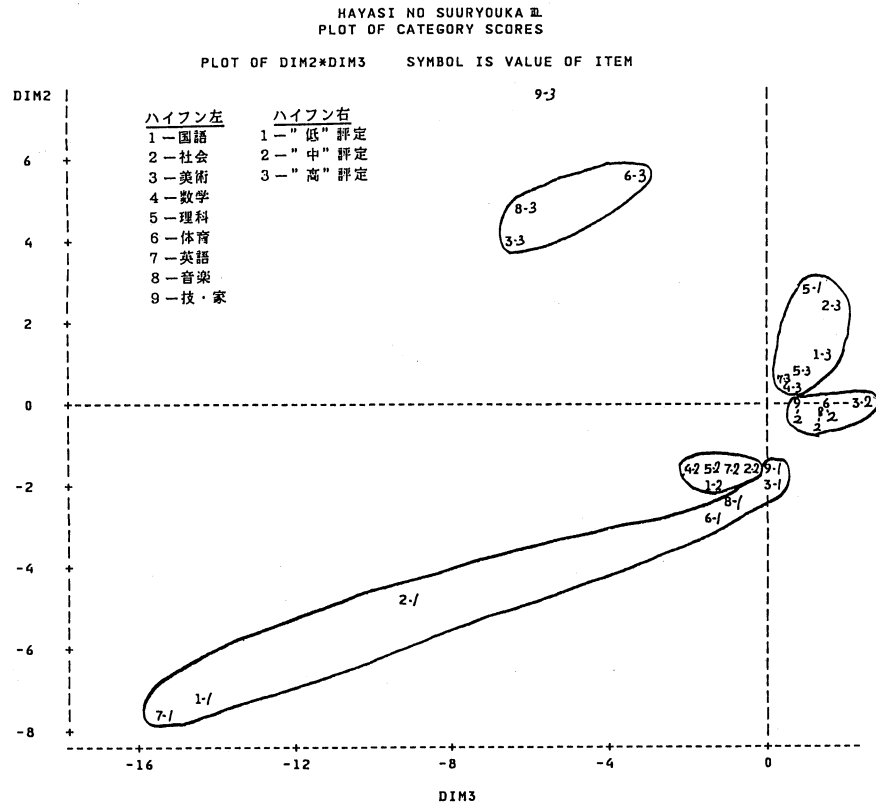


図-4 数量化Ⅲ類による教師のパターン分類（2軸×3軸）

一瞥して気がつくことは、第一グループがどうもひとつのグループとしてはまとまりを欠いたものであるということである。とくにⅢ軸上でみるかぎり、大変におおきな分散を示している。Ⅰ軸、Ⅱ軸上でも比較的に大きく分散している。

ところで第一グループ内の分布状況を詳しくみてみると、美術-低、体育-低、音楽-低、技術・家庭-低が相互に近接しており、ひとつのグループをなしていることがわかる。他はどちらかという相互に孤立しているとみなしたほうがよい態のものである。

図をみてもう一度指摘しておかなくてはならないのは、音楽-中の位置付けである。どの軸よりみても美術-中、体育-中、技・家-中のグループにいれられるべきである。

技・家-高は、微妙な位置にあるが、一応ここでは省いておきたい。

従って、教師のグループは以下のように修正されるべきであるように思える。

- A：音楽-低，美術-低，体育-低，技術・家庭-低
- B：数学-中，英語-中，国語-中，理科-中，社会-中
- C：数学-高，英語-高，国語-高，理科-低，理科-高，社会-高
- D：音楽-中，美術-中，体育-中，技術・家庭-中
- E：音楽-高，美術-高，体育-高

（その他：英語-低，国語-低，社会-低，技術・家庭-高）

以上の結果は概ね次のようにまとめられるであろう。

担当教科という観点からみた教師をその被評定的地位レベルから分類すると大きく五つのグループにわかれる。低く評定される教師ではそのなかの非受験教科の担当教師が同じグループを形成し、中程度に、又は高く評定される教師は担当教科が受験教科であるかないかによってそれぞれにまた別のグループにわかれる。

註

- 1) 新堀 通也, 「現代日本の教師～葛藤を中心にして～」教育社会学研究 第28集 1973 4ページ
- 2) 耳塚, 他, 教師への社会的アプローチ研究動向と課題—教育社会学研究 第43集 1988 95ページ
- 3) 1) 5ページ
- 4) 我が国において, 1955, 1965, 1975の3回にわたってSSM調査が実施されており, 日本における社会階層と社会移動の解明に大きな貢献をなしている。なお今日, 1955, 1975両年調査については, 尾高邦雄編; 職業と階層 毎日新聞社, 富永健一編; 日本の階層構造 東京大学出版会 によって知ることができる。
- 5) このような動向に決定的な契機を提供したのは周知のように「教師は専門職として見なされるべきである」とした, 1966年のILO・ユネスコ「教師の地位に関する勧告」である。
- 6) 例えば市川昭午は「準専門職」としている。市川昭午, 専門職としての教師 明治図書, 1969
- 7) 例えば, SSM調査では実際に「小学校の教諭(先生)を評定させ, その結果から「中学校教員」「高校教員」も同じスコアとして類推され, 提示されている。富永健一編; 日本の階層構造, 東京大学出版会 1979 499ページ
- 8) 1) 5ページ 1973

II. 体育教師の社会的地位を規定する要因の検討

1) 教師の地位を規定する要因の検討(評定基準)

職業は生涯において人生の大きなウェイトを占める領域であり, それだけにその評定にはさまざまな価値観が評定基準としてはたらいっているものと考えられる。

'88年調査では次の六つの基準を提示し, 重視の程度から四段階の評定を求めているので, これをデータとして用いて, 重回帰分析により地位スコアにたいする評定基準の影響についてみることにする。

- A 1 : 収入の高さ
- A 2 : 責任の大きさ
- A 3 : 学歴の高さ
- A 4 : 必要とされる能力の高さ
- A 5 : 能力を発揮する機会の多さ
- A 6 : 世間から受ける尊敬の大きさ

まず, 小学校教員, 中学校教員, 高校教員, それに対照のために医師を従属変数として分析した

重回帰式は以下のとおりである。

$$\text{小学校教員} = 49.50 + 1.78A_1 + 5.13^{**}A_2 + 0.32A_3 + 0.79A_4 - 2.31A_5 - 3.58^{**}A_6$$

$$R\text{-SQUARE} : 0.117$$

$$\text{中学校教員} = 55.97 + 1.11A_1 + 4.16^{**}A_2 + 1.25A_3 + 0.49A_4 - 3.17^*A_5 - 3.45^{**}A_6$$

$$R\text{-SQUARE} : 0.115$$

$$\text{高校教員} = 45.86 + 1.50A_1 + 4.70^{**}A_2 + 2.87A_3 + 0.81A_4 - 2.44A_5 - 2.32A_6$$

$$R\text{-SQUARE} : 0.122$$

$$\text{医師} = 73.60 + 3.40^{**}A_1 + 2.33A_2 + 1.07A_3 + 2.27A_4 - 1.22A_5 - 3.12^*A_6$$

$$R\text{-SQUARE} : 0.120$$

いずれの職業においても、モデルの全体としての寄与率を表す、従属変数と予測値との重相関係数の二乗（R-SQUARE）は低く、職業評定の規定要因の多様性を窺わせている。

さて、結果を学校段階別の三種の教員の間でみてみよう。

評定基準の前におかれたパラメータは“偏回帰系数”と呼ばれるものであり、それぞれの評定基準の従属変数（ここでは、各学校段階の教員や医師の地位スコア）にたいする規定力を示す。たとえば+3とでておれば、当該独立変数が値を1単位増加させた場合に従属変数が値を3ポイント増加させる（-3であれば、3ポイント減少させる）ということの意味している。

符号でみるかぎり、いずれの学校段階においても違いはみられず、教員の間にも、職業評定基準の規定構造における差異はないようである。いずれの場合も、「収入」「責任」「学歴」「能力」といった基準は地位を高める方向に効いており、特に「責任の大きさ」はいずれにおいても1%の危険率で有位な偏回帰係数となっていて、規定力の強さを示している。他方、評定基準「能力発揮」「尊敬」は教師の地位スコアを低める方向に効いており、特に「尊敬」は小学校、中学校では危険率1%の強い規定力であり、「能力発揮」も中学校で5%の危険率で規定力をもっている。このように、規定力の程度においては教師間で微妙な違いもみられる。

ところで、調査した全職業中で一番高い地位スコアを示したのが自他ともに専門職としての評価を享受している医師であったのであるが、ここでの重回帰分析でみると、教師とは幾分異なった職業の評定基準による規定構造をみせている。

符号のパターンは変わらないものの、「収入」が1%の危険率で効いており、得られる収入の高さを職業評定の基準として重視する人ほど医師の地位を高く評定している。「尊敬」は5%の危険率でマイナスの規定である。

このように、学校の教師と医師のあいだでは、地位を規定する評定基準の構造に違いがみられるのである。

2) 体育教師の地位を規定する要因の検討

ところで、体育教師が他の職業や教師にくらべてどのような社会的地位を占めているかということは、一般的な関心と呼ぶことはあってもそのこと自体においてはそれほど意味はない。運動文化や体育の意義をみとめている人や、その普及のための基礎を受け持っている体育教師にとってはなによりも地位向上を阻んでいる原因や、地位向上の具体的な方略をつきつめていくことこそ焦眉の課題だからである。ここでは、6領域、30アイテム、97カテゴリーからなる要因から体育教師はその地位をどのように規定されているかをみとめることにする。表-5は、その分析結果の一覧である。

領域は次の通り。

性、年齢、学歴、職業、生活水準といったアイテムからなるデモグラフィック領域。小から中、高、大学（短大を含む）の各学校段階において子どもをもっているかどうかという子どもに関する領域。職業の評定にあたって、得られる収入や尊敬、必要とされる責任、学歴、能力を発揮する機会、がどの程度重視されているかについての評定基準に関する領域。学校時代の経験を通して得られた教科のイメージ領域と教師についてのイメージに関する領域。

最後に、生活目標や基本的な指向性を聞いた価値観についての領域である。

分析全体の成績の目安となる重相関係数は0.691であり、外的基準としての体育教師の地位スコアの分散の48%（重相関係数の二乗；決定係数）を説明していることになる。

極めて複雑な要因による影響を受けていると考えられる社会的地位といった指標の性質を勘案すれば、ほぼ満足できる成績であるといえよう。

以下、有意な偏相関を示したアイテムについて説明を加えていくことにする。

0.1%の危険率という、極めて高い規定力を有するアイテムは次の通り。

①学歴；高くなるほど体育教師の地位を低く評定する傾向が認められ、とりわけ大学卒の低評定ぶりが目立つ。'86年調査の分析から、「体育教師の地位は評定者の学歴に反比例する傾向が他教科に比べて高いのではないか」とする仮説を支持する結果を部分的に得たのであるが、他教科との比較はさておいて、学歴の高さに反比例する体育教師の地位評定は、極めてクリアな傾向であるといえよう。なかでも、「中学」と「大学」のあいだにおける懸隔は甚だしい。

②学歴（評定基準）；学歴社会という言葉が定着していることであらわれているように、職業の評定にあたって、それに就くために要求される学歴を重視する人ほど体育教師の地位にたいして低い評定を下す傾向がきれいにでてくる。②との関連でいえば、高い学歴を有しているひと程、職業の評定において、それに就くために必要とされる学歴の高さを重要視するということであろう。ただ、それらのことがらが、体育教師の低評定をもたらすメカニズムについては考察を要する。

③力をいれた；学校時代に体育の授業に力を入れて取り組んだかどうか、強く効いている。ただ、その様相は複雑で、中間派が高く、両端派は低く効いている。

表-5 体育教師の地位スコアを規定する要因
 ~数量化理論Ⅰ類による分析~ N=163 1988

	アイテム	カテゴリー	f	c s	偏相関	t-値		アイテム	カテゴリー	f	c s	偏相関	t-値			
デ モ グ ラ フ イ ツ ク 要 因	性	男	72	-1.98	.097	1.243	教 科 イ メ ジ	自分の将来に	肯定	44	-1.87	.129	1.664			
		女	91	1.56		中間			65	-1.88		否定	54	3.76		
	年 齢	20-29	29	-4.48	.130	1.658		得意であった	肯定	63	1.25	.064	0.812			
		30-39	39	0.73		中間			57	0.11		否定	43	-1.98		
		40-49	43	0.21		社会の将来に			肯定	32	6.71	.229	2.986			
		50-73	52	1.78					中間	82	-3.81		否定	49	1.99	
	学 歴	中学	20	9.55	.273	3.598		力をいれた	肯定	43	-3.10	.336	4.532			
		高校	96	0.14		中間			67	7.57		否定	53	-7.05		
	職 業	農林・漁業	サービス・営業	11	-2.16	.168		2.158	楽しかった	肯定	82	-0.87	.096	1.218		
			管理・専門	11	3.21			中間		53	-0.69		否定	28	3.85	
		事務	主婦	45	-2.72			責任感		肯定	58	3.28	.294	3.898		
			その他	4	5.91					中間	75	-5.65		否定	30	7.78
生活水準		上	6	0.32	.211	2.739	全体に関心	肯定		55	-0.45	.160	2.059			
		中の上	63	-0.14		中間		74		2.52		否定	34	-4.77		
中の下	中の下	64	-3.08		ひとりよがりしない	肯定	73	3.66	.190	2.455						
	下	30	6.80			中間	72	-2.32		否定	18	-5.54				
子 ど も	小学校	有	29	6.16	.168	2.158	広い教養	肯定	38	-0.53	.126	1.606				
		無	134	-1.33		中間		83	1.98		否定	42	-3.44			
	中学校	有	29	0.07	.002	0.024		専門的素養	肯定	91	1.88	.147	1.886			
		無	134	-0.02		中間			55	-3.72		否定	17	1.98		
高校	有	23	-6.45	.141	1.807	教育的信念	肯定	61	4.58	.402	5.567					
	無	140	1.06		中間		79	1.80		否定	23	-18.30				
大学	有	25	1.88	.048	0.608	えこひいきしない	肯定	57	-3.63	.145	1.861					
	無	138	-0.34		中間		74	2.20		否定	32	1.37				
評 定 基 準	収入	無視	22	-1.98	.068	0.866	価 値 観	生活目標	快利愛正	22	-6.35	.274	3.619			
		軽視	46	1.04		75			-2.82		保守性	肯定	82	1.13	.097	1.243
		やや重視	52	-0.85		47			2.60			弱肯定	54	-2.39		
		重視	43	0.93		19			12.04			否定	27	1.35		
	責任	無視	2	14.18	.207	2.678		他人指向	肯定	40		3.19	.107	1.370		
		軽視	26	-5.46		重相関係数; 0.691			弱肯定	104	-1.09		f ; 人数	c s ; カテゴリースコア	*** p < .001 ** p < .01 * p < .05	
	やや重視	50	4.00		能力			無視	12	3.81	.189	2.447				
	重視	85	-1.02			軽視		55	-4.67		能力発揮	やや重視	59	2.30		
	学歴	無視	19	3.41	.284	3.765		重視	37	2.03						
		軽視	63	5.32		尊敬		無視	39	-5.67	.218	2.831				
		やや重視	62	-4.83				軽視	64	4.18		やや重視	重視	44	-0.08	
	重視	19	-5.27		重視	16		-2.68								

④責任感 (教師イメージ) ; “自分に厳しく責任感が強い” というイメージを体育教師にもっていないものが一番高く評定している。それにたいして中間が一番低い。

⑤教育的信念 ; 否定的なイメージがおおきく低評定に効いているのが特徴的。“しっかりした教育的信念” を持っていると思なされない場合、体育教師の地位にとってダメージになるということであろう。

⑥生活目標 ; “みんなと力を合わせて、世の中をよくする” という「正」価値感が高い方向に効いており、“その日その日を自由に楽しく過ごす” 「快」価値観が低い方に効いている。「愛」「利」の効き方も含めて考えると、体育教師は、“個人指向” のひとよりも“集団・社会指向” タイプのひとに高く評定されている。

1%の危険率で有意な規定力を示すアイテム。

①生活水準 ; 「下」の生活水準がとくに高い方向に効いている。

②責任 ; 評定基準として“責任の大きさ” を全く重視しないものは体育教師の地位を高くみなしている。しかし頻度が2人とも少なく、他のカテゴリーとも直線的な傾向をなしていないので、はっきりとはいえない。

③尊敬 ; 「無視」が高い方へ、「軽視」が低い方に、それぞれに比較的効いて、偏相関を高くしていると思われるが、一定の傾向性を見いだせない。

④社会の将来 ; “社会の将来の発展にとって大切であると思った” にたいする肯定が高い方へ、中間が低い方に効いている。

5%の危険率で有意な規定力を示すアイテムは、①職業、②小学校の子ども、③能力発揮、④学校全体の教育への関心、⑤ひとりよがりの授業である。

以上、各種要因の体育教師の地位スコアにたいする規定力の様相をみてきたのであるが、アイテムとしての規定性については共感できるもののおおいものの、カテゴリーのレベルにおいた解釈には判然としないもののおおく、今後、標本の増加や再カテゴリー化の工夫によって、解釈の可能性を詰めていきたい。

3) 体育教師と数学教師の評定パターンを規定する要因の検討

体育教師の地位スコアの評定のされかたは、他教師の地位スコアの評定のされかたとどのような関係にあるのであろうか。ここでは「他教師」として、最も高い地位スコアを得た数学教師をとりあげ、両教師の地位の評定のされかたにどのような関係があるかを探ってみることにする。

具体的は、体育教師を相対的に高く (この場合、50以上100以下) 評定し、数学教師を相対的に低く (この場合、50以上75以下) 評定した64人からなる群と、体育低評定 (0以上50以下)、数学

表一六 体育教師高評定群と数学教師高評定群を判別する要因
～数量化理論Ⅱ類による分析～ N=139 1988

	体育教師高評定群					数学教師高評定群									
	アイテム	カテゴリー	f	c s	偏相関	t-値	アイテム	カテゴリー	f	c s	偏相関	t-値			
ア デ モ グ ラ フ イ ツ ク 要 因	性	男	63	0.28	.195	2.325	教 科 イ メ ジ	自分の将来に	肯定	37	0.26	.151	1.780		
		女	76	-0.23				中間	60	0.02					
	年	20-29	24	-0.11	.130	1.535		否定	42	-0.26					
	ラ	学	20-29	24	-0.11	.130		1.535	得意であった	肯定	53	0.00	.029	0.345	
			30-39	31	-0.11				中間	51	0.03				
			40-49	39	0.24				否定	35	-0.05				
	フ	歴	中学	18	-0.02	.123		1.454	社会の将来に	肯定	29	-0.82	.357	4.470	
			高校	82	0.02				中間	71	0.27				
			短大	17	-0.29				否定	39	0.12				
			大学	22	0.17				力をいれた	肯定	36	-0.31			.303
イ	職	農林・漁業	10	-0.02	.183	2.176	中間	57	-0.22						
		サービス・営業	30	-0.07			否定	46	0.52						
		管理・専門	9	-0.29			.120	1.419	楽しかった	肯定	70	-0.07			
		業	47	-0.18					中間	45	-0.07				
主婦	39	0.35	否定	24	0.32										
その他	4	-0.09	責任感	肯定	50	-0.14			.267	3.240					
ツ	生	上	6	0.23	.127	1.496	中間	64			0.32				
		中の上	54	-0.16			否定	25			-0.55				
		中の下	54	0.12			.172	2.043	全体に関心	肯定	49	0.21			
		下	25	0.02					中間	62	-0.18				
ク	小	小学校	25	0.28	.128	1.509			否定	28	0.04				
		有	114	-0.06					.003	0.293	ひとりよがり	肯定	65	0.07	
		無	114	0.01			中間	59			0.08				
		中学校	25	-0.06			否定	15			-0.60				
要	中	有	22	0.01	.002	0.027	イ	メ			広い教養	肯定	34	-0.07	.095
		無	117	-0.00					中間	71	0.10				
		大学	21	0.07					否定	34	-0.14				
		有	118	-0.01					専門的素養	肯定	80	0.10	.119	1.416	
因	大	無	14	-0.49	.270	3.276	中間	45	-0.11						
		軽	40	-0.22			否定	14	-0.23						
		やや重	46	-0.01			.381	4.821	教育的信念	肯定	52	-0.24			
		重視	39	0.41					中間	67	-0.14				
責任	23	-0.01	否定	20	1.10										
無	45	-0.34	.062	0.732	えこひいきし	肯定			52	-0.06					
軽	71	0.22			中間	59	0.09								
やや重	14	0.62			.314	3.866	生活目標	快	20	0.46					
重視	57	-0.40					利	68	0.11						
学	52	0.26	愛	38			-0.30								
歴	16	0.04	正	13			-0.41								
評 定 基 準	収入	無	21	0.42	.179	2.133	価 値 観	イ	メ	保守性	肯定	71	0.20	.239	2.880
		軽	76	-0.13						弱肯定	45	-0.08			
		やや重	42	0.02						否定	23	-0.46			
		重視	9	-0.03						.262	3.178	他人指向	肯定	36	-0.21
	無	49	0.34	.237	2.852	弱肯定		87	0.09						
	軽	51	-0.31			否定		16	-0.01						
	やや重	30	-0.02			成功指向		肯定	52			0.23			
	重視	34	0.36			弱肯定		47	-0.34						
	能力	無	55	0.12	.288	3.516		否定	40	0.10					
		軽	36	-0.44				.270	3.276	メ	ジ	専門的素養	肯定	80	0.10
やや重		14	-0.49	中間			45					-0.11			
重視		46	-0.01	否定			14					-0.23			
責任	23	-0.01	.234	2.820	教育的信念	肯定	52					-0.24			
無	45	-0.34			中間	67	-0.14								
軽	71	0.22			否定	20	1.10								
やや重	14	0.62			.314	3.866	えこひいきし	肯定	52	-0.06					
重視	57	-0.40	中間	59			0.09								
学	52	0.26	.314	3.866			生活目標	快	20	0.46					
歴	16	0.04					利	68	0.11						
能力	21	0.42			.179	2.133	愛	38	-0.30						
軽	76	-0.13					正	13	-0.41						
やや重	42	0.02	.262	3.178			他人指向	肯定	36	-0.21					
重視	9	-0.03					弱肯定	87	0.09						
能力	49	0.34			.262	3.178	否定	23	-0.46						
軽	51	-0.31					成功指向	肯定	52	0.23					
やや重	30	-0.02	弱肯定	47			-0.34								
重視	34	0.36	否定	40			0.10								
尊	無	34	0.36	.288	3.516	成功指向	肯定	52	0.23						
	軽	55	0.12			弱肯定	47	-0.34							
	やや重	36	-0.44			否定	40	0.10							
	重視	14	-0.23												

外的基準 体育・高*数学・低 \bar{M} ; -0.804 SD; 0.621
 体育・低*数学・高 \bar{M} ; 0.686 SD; 0.718
 相関比; 0.551

f; 人数
 c s; カテゴリースコア
 ※※※... P < .001 ※※... P < .01 ※... P < .05

高評定 (100) の75人からなる群を操作的につくり、両群の判別にどのような要因がどのような規定力を示すか、ということをも、数量化理論Ⅱ類の手法により、分析しようというものである。

表-6は分析結果を一覧にしたものである。

みられるように、とりあげられる説明変数は、表-6で使われたものに、「成功指向」アイテムを加えたものである。

全体の精度を意味する相関比をみると、0.551をだしており、弁別判断を86パーセントの的中率を示していることから、この種の調査にしてはほどほどの成績になっている、といえよう。

アイテムの規定力を偏相関を目安としてながめてみると、31アイテム中17アイテムが有意な規定力を示している。領域としては、「職業の評定基準」や「価値観」がかなり強い影響力を及ぼしており、「デモグラフィック」な領域や「子どもの有る無し」領域は関係があまり無いということがみてとれる。「教科イメージ」、「教師イメージ」の効き方はなか程のようである。

表の下に記したように、体育・高一数学・低群の数値の平均が-0.804とでており、他群が0.686になっているので表中のカテゴリースコアはそれを参考に方向を読み取っていくことができる。

規定力の強いアイテムから順次その内容をみていくことにする。

0.1%の危険率で有意な規定力を示すアイテム。

①学歴 (評定基準) ; 「無視」と「軽視」の間で大きく分かれ、「軽視」が体育・高*数学・低群 (以下、体育群と略) に、「無視」が体育・低*数学・高群 (以下、数学群と略) にそれぞれ傾いている。「やや重視」がまた数学群に若干偏っているのをみると、職業の位置付けにあたって、必要とされる“学歴の高さ”の重視の程度は、無視から重視の方向が、体育群から数学群への移行を示すのではないと思われる予測には必ずしも一致するものではない。

②尊敬 ; 「重視」「やや重視」が体育群に、「軽視」「無視」が数学群にそれぞれ傾いていて、比較的はっきりした傾向になっている。「尊敬」の内容をはっきりすることはできないが、教科内容が身近なものであるだけ、“世間から受ける尊敬の大きさ”の重視が体育群に効いているのかもしれない。

③「社会の将来」 ; 社会の将来にとって大切であると思った「肯定」カテゴリーは体育群に強く効いており、他のカテゴリーはやや数学群に近いといったところ。

一般的に、体育は社会の有り様とは関連づけて促えられにくいのであるが、上記結果はこの点で興味深い。社会の維持・発展に対して持つ体育教科の機能ということについての理解が重要であるかもしれない。

④力をいれた ; 「肯定」「中間」がやや体育群に、「否定」が数学群に傾いている。

ここで取り上げた「教科イメージ」や「教師イメージ」に関するアイテムはすべて体育についてのものであるので、当然の結果ともいえるのであるが、体育の授業に“力を入れて取り組んだ”という感想はやはり体育教師の数学教師に対する相対的な地位の高さに寄与するものであろう。

⑤教育的信念；「肯定」「中間」が体育群の方向に、「否定」が数学群に傾いている。

これも当然といえば当然であるが，“しっかりした教育的信念と情熱”を体育教師に認めることは、数学教師に対する体育教師の相対的な地位の高さに寄与しているのである。

1%の危険率で有意なアイテム。

①収入；「重視」が数学群に、「無視」の方向が「体育」の群の方向にそれぞれ効いている。

職業の選択や位置づけにあたって、そこから得られる収入は大きな判断材料になるものと思われるが、数学教師に比べて体育教師は、収入を重視しないひとびとによって相対的に高く評定されている。

②責任（評定基準）；「軽視」が体育群の方向、「やや重視」が数学群の方向にそれぞれ傾いている。

③能力発揮；「軽視」が数学群に、「やや重視」が体育群にそれぞれ近寄っている。

②との関連でいえば、負わされる“責任”はあまり重視されず、しかしみずからの能力を発揮する機会をやや重視しているのが体育群の特徴になっている。

④責任感（教師イメージ）；「否定」が体育群に強く、「中間」が数学群に、傾いている。

②ともオーバーラップするのであるが、体育群は“責任感”については否定的なカテゴリーに属する傾向にあるようである。

⑤生活目標；「愛」「正」が体育群に、「快」「利」が数学群の方に寄っている。「愛」「正」に共通するのは“社会”であり、「快」「利」に共通するのが“個”であることを考えると興味深い。体育群は“社会派”と言えるのかもしれない。

⑥成功指向；「肯定」が数学群に、「弱肯定」が体育群に比較的に効いている。

現今の社会における“成功”にたいする数学の結び付きの強さの反映であろうか。

5%の危険率で有意なアイテム、そのカテゴリースコアによる内容は次の通り。

①性；「男子」は数学群、「女子」は体育群に属する傾向にある。

②職業；「管理・専門」「事務」が体育群に、「主婦」が数学群に効いているのは比較的に目立っている。

③能力（評定基準）；「無視」が数学群に効いており、「軽視」がやや体育群に効いている。

④全体に関心；「肯定」が数学群に、「中間」が体育群にそれぞれ比較的に効いている。

⑤ひとりよがりでない；「否定」が体育群に強く効いている。

要約と課題

体育教師を職業として社会的地位という観点から実証的に分析してきたわけであるが、ここでは

まとめとして簡単に要約を試み、考えられる課題について触れておきたい。

最初に、調査・分析の焦点、仮説として四点を提示しておいたので、それにそって述べていくことにする。

小、中、高と学校段階ごとの教員を他の職業のなかにおいて評定させたところ、「学校段階が高くなるにつれて教師の地位は高くなる」ことが確かめられた。特に高校と中学以下とのあいだに他の職業を挟む程の距離が示された。

このことの理由については、教育内容としての知識や技能の高度化、および分化、必要とされる学歴の高度化、構成人口の少なさという四点から言及しておいたところである。¹⁾

次に、教師の地位はまた担当する教科によって影響されることが確かめられた。結果をみると、受験に関わる教科であるのか否かによって分化がおおきく押し進められているいることがあきらかになった。さらに、評定のされかたと担当教科を組み合わせたものを、グループピング化する試みにも着手し、これからの分析を深めるための手がかりを提供した。

学校生活を通じて得られた、教師や教科にかんするイメージは教師の地位評定に影響すると予想されたが、幾つかのアイテムは有意な規定力を示した。そのなかにあって「楽しさ体験」は、規定力は強くはないものの、体育教師の高い地位評定には結びつかず、昨今の“楽しい体育授業”のありかたにも一考を加える必要を感じさせた。

以上の結果にたいして、職業評定の基準や価値観にかかわるアイテムに強い規定力を示すものがみられた。なかでも、価値観にかかわって、「個人指向」にたいして「社会指向」が体育教師の地位スコアに寄与するという結果は、追跡的な研究を促すほど、興味深いものであった。

以上が本研究結果の概略であるが、分析し残したデータもある。

それらのデータを厳密に分析し、これまでに得られた結果を検証することはもちろんであるが、さらに調査枠組みに付け加えなければならない領域も存在する。

想起法の限界はあるにしても、特に授業の過程や運動文化にたいする理解のあり方に関する変数は重要であるように思える。

註

- 1) 岡田猛・武隈晃, 体育教師の社会的地位に関する研究(Ⅲ)～教師内地位の分化と教科・教師イメージ～ 鹿児島大学教育学部研究紀要(人文・社会科学編)第39巻 1987 100ページ